

図書 紹介  
寄生虫なき病

著者：ベラスケス=イノフ、モイセズ(科学ジャーナリスト)

訳：赤根洋子(翻訳家)

発行：(株)文芸春秋／〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23／TEL03-3265-1221／

四六判／507 頁／価格 2200 円（税別）／2014 年 3 月 15 日発行

本書の原題「an epidemic of absence」である。「不在の病」とは、寄生虫、細菌、ウイルスなどがいなくなることによって引き起こされる病気のことである。これらを駆逐したことによって感染症が激変した超清潔な社会になっている。しかし、花粉症、喘息、アレルギー、自己免疫疾患などの新たな病も出現している。このような「寄生者不在」によるバランスの乱れが原因なのか、自己免疫疾患を患う著者が膨大な研究と科学者へのインタビューから「不在の病」の全貌に迫り、自らも寄生虫を腸内に感染させる治療法に挑戦するストーリーとなっている。

本書は、1～15 章、謝辞、訳者あとがき、解説 福岡伸一「不在」による病及び巻末には 681 の注と掲載されており、膨大な研究をうかがい知ることができる。

各章とその小見出しを見ていくと、第 1 章 寄生虫に感染しにゆく：著者はメキシコに向かう。そこでアメリカ鉤虫という恐ろしい寄生虫にわざと感染して、長年の自己免疫疾患を治癒しようというのだ、第 2 章 我々は「不潔なサル」である：ヒトは、旧石器時代から寄生生物とつきあってきた、むしろそれが免疫の進化の原動力だった。しかし、産業革命はすべてを変えた、第 3 章 自己免疫疾患の島で何が起こったか：イタリア・サルデーニャ島は、自己免疫疾患の発生率が極めて高い。それはマラリア原虫の撲滅と同時に始まった。両者の関係とは？、第 4 章 寄生虫治療、最初の試みで：自己免疫疾「炎症性腸疾患」(IBO)の治療に、豚鞭虫を使う大胆な試みが行われた。劇的な効果の報告は大論争を巻き起こした、第 5 章 喘息が出現しはじめた理由：アフリカで存在しなかった喘息が現われはじめた。それは寄生虫の不在が原因なのか。アレルギーとの関係は。謎は一筋縄では解けない である。

第 6 章 我々が失ったのは寄生虫だけではない：人間が対処してきた寄生虫には、より小さな微生物もいる。細菌の多い環境で微生物多様性を育てる重要性と意味を、多方面から探る、第 7 章 母体の環境が子どもの病を決める：母親が妊娠中に接していた微生物環境が、生まれてきた後の本人の環境以上に影響する？ 意外な「環境の遺伝」エピジェネテ

イクスの謎、第8章 「悪玉」ピロリ菌は役に立っていた？：胃ガンの原因として嫌われているピロリ菌が実は母から子へ伝えられ、免疫細胞を制御して喘息やアレルギーを予防し、人と共存していた、第9章 「体内生態系」の混乱：腸内細菌の「生態系」は微妙なバランスの上で、健康に重要な役割を果たしている。抗生物質や食習慣の変化がいかにそれを乱したか、第10章 多発性硬化症から分かったウイルスの重要性：厄介な疾病、多発性硬化症にはごく普通のウイルスが大きく関係していた。細菌だけではなくウイルスも人と相利共生関係を持っている、第11章 自閉症も寄生者不在の疾病なのか？：精神障害と思われがちな自閉症にも、免疫の関係がわかってきた。寄生虫療法で治癒した症例もある。考え方を変えるべきときが来た、第12章 ガン、うつ病、老化まで—文明病に潜む炎症：免疫の暴走による炎症反応は、想像を超えて様々な病気を引き起こしている。肥満、糖尿病、ガン、うつ病。文明病の根はここにある である。

第13章 鉤虫アンダーグラウンド—寄生虫に希望を求めて：自己免疫疾患を治療する最後の希望として、寄生虫を売買する人々がいる。だが、アンダーグラウンド療法ゆえの矛盾、軋轢は絶えない、第14章 私の寄生虫療法体験記：そして、著者には何が起こったか。大変な苦労の末 アレルギーが改善し、産毛も生えた！ 大きくはないが、明確な変化の理由とは である。

第15章 超個体の再生：人と、腸内細菌、微生物、ウイルス、寄生らがおりなす「超個体」の再生こそ必要。免疫機能を調整する「生態系」回復の未来は である。

本書は440頁を超える長編の上に、内容も複雑多岐に渡っているが、読みやすく、つい引き込まれていく。寄生虫にはじまり、自己免疫疾患、アレルギー、アトピーなど現代病として注目されている疾患やピロリ菌についても言及されている。多くの人々を悩ます花粉症も花粉の「存在」だけが原因ではない可能性がある。これらを解決する鍵は寄生虫にあるが、その原因は特定の寄生虫の「存在」が引き起こしているのではなく、「不在」によって引き起こされていたのだという。「不在」によって、私たちの免疫系が過敏になりすぎているのかもしれない。

現代の日本人の過剰なまでの清潔志向は、「抗菌グッズ」として文房具や家電製品、トイレ用品、台所用品、布団、靴下、下着等々あらゆるものに及んでいる。それに当学会も大きく貢献してきたわけであるが……。会員諸氏には是非一読してほしい一冊である(学会事務局)。